
レーク*ダン*ループ

丸袋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レーク*ダン*ループ

【Nコード】

N6024C

【作者名】

丸袋

【あらすじ】

某年某月某日。日本のとある空き地に未確認飛行物体、墜落。

ブローグゝ例えばの話ゝ

『例えば』の話。

例えば、UFOを見てしまった場合。

例えば、それが家のすぐ近くの空き地に突き刺さるようにつともない形で墜落した場合。

例えば、暫くしてその中から既存の宇宙人キャラクターグッズそのまんまの生物が、腰をさすりながら這い出て来た場合の話である。

目が飛び出る程驚くのか。

グロテスクなその生物を前に恐怖を感じただただ震えるか。
はたまた啞然とするばかりか。

因みに、以上の状況を実際に経験したラッキーボーイを私は知っているが、彼は”腹を抱えて笑った”らしい。

其ノ壱 調査結果報告書

第136回調査結果報告書>>国家機密書<<

調査団第一支部 指揮官：田上 秀次

監視官：榊 真紀

調査員：〴〵（中略）

以上24名による調査結果

1・以後異星人を『P』と記し、第一支部監視対象にあたる異星人を『P1』『P6』と記す。

2・以後監視官：榊 真紀第一対象である異星人を『P1』と記す。

「身体的特徴について」

外見

人類の平均身長・体重の三分の二―二分の一が平均体型にあたる。主な特徴として、やや大きめの頭部、顔面の約半分を占める眼球（瞳孔の有無不明）、性器が無い、等挙げられる。

総合的に旧人類が作り出した想像上の『宇宙人』と酷似。

他、基本的に声帯を持たず（一部例外あり）仲間間の意思伝達方法は不明（解析不可）

個人毎に役割が決められているもようで、中には変体能力や浮遊能力を持つ者も居る。

・
（中略）

内面

現時点（2XXX年7月2日）では凶暴性感じられず。人類への敵対心の有無は不明。

人類との意思疎通方法はPからの思考伝達で成り立つ。また、その相手は万人に務まらず、P自身に選ばれた人間のみが意思疎通を可能とする（選択基準一切不明。調査難航）

好奇心は旺盛だが、現時点では人間観察の域を出るものではないとの結論。

・
（中略）

「P調査団第一支部調査経過」

一部抜粋

2XXX年7月3日

午後4時33分。市町4-32（榊邸裏の空き地。所有者”榊 治夫”）に、直径約120mの円盤型飛行物体が墜落。

同日10分後、負傷した一名の異星人確保（その異星人にある右腕の痣より『P』と命名）

他数百名も救助。直後に隔離。

2XXX年7月14日

政府要人による緊急会議の末、研究者総勢1万名による調査本部立ち上げ。

市民の安全確保、P に関する情報の収集、動向の監視、一定箇所への隔離を命じ、同時に第一支部、第五支部を立ち上げる。

2XXX年8月11日

第一支部調査対象P1は意思伝達の対象に『榊 真紀（現監視官）』を指定。

同日より監視施設内共同生活開始。

（中略）

2XXX年3月16日

追加監視対象としてP2、P6が指定施設内へ移動（P6は第三支部より移動）

榊監視官の管理対象となる。

（中略）

（中略）

（中略）

以上。ここに記す全ての情報、記録を機密事項とし、外部への持

ち出しを禁じる。

其ノ貳 田上・タガミ・

「…で。何だこれは」

机の上で申し訳なさそうに佇んでいた資料を、まるで汚い物でも触るかのように指先ではじき、一言そう言った。

”何だこれは”も糞も無い。

10年間で調べ上げた全ての情報を、1日で分かり易く簡潔にまとめよと命令したのは、目の前に居る顔のいかつい男”田上”本人である。

「何だと申されました…それが全てです」

「…これで…全てだと？」

田上の手にあるレポート用紙はおよそ50枚前後。しかも理解不能な図や再現写真が枚数稼ぎの如く幅を利かせていて、実際使える情報は10枚程で事足りる。

この資料を作成した”22名の研究員達”も、敢えて言われなくとも分かっているのだろう。頑として田上と目を合わせない。

「…分かった。有り難う、下がっていいぞ」

その一言を合図に蜘蛛の子を散らしたように退散する研究員を見送りながら、大きな溜め息をついたその時。

「相変わらずはかどってなさそうだなあ」

真後ろにある窓の外から聞こえた声に振り向くと、案の定見知った男が居た。

「…榊」

「背中に哀愁が漂ってる。いいのか？第一支部のヘッドがそんな情けない風体で」

”榊”と呼ばれた男は右手に煙草を揺らし、ニタニタしながらそう言った。

「悪かったな、情けない指揮官で。それよりお前、ここが何階だか分かってるか？」

「当たり前だろ。毎回わざわざ木を登ってここまで来てるんだ。流石に一階では無い事位気付く」

三階に位置する樹齢百年の木の枝に乗って飄々と言つてのける榊に、田上は心底呆れたとばかりに目を細める。

肩辺りまで伸びた髪を無造作に束ね、浴衣を着崩しているこの男。一見年齢不詳だが、田上とは小学校で同級生になって以来腐れ縁が続く同年であった。

三十代後半という年で実行する、毎度毎度の木登りにはある意味脱帽である。

「いい加減正面から入って来いよ。腰痛めて落下しても知らんぞ」

「そりやおたくの部下が歓迎してくれるなら、の話だろ。正面からなんて嫌な顔されて追い返されるのが関の山だ」

「……それは、」

「お。”調査報告書”…？これ見て凹んだのか？」

田上の言つ言葉に耳もくれず部屋に侵入すると、デスクにある書類をひよいと拾い上げた。

「あ、おいっ、勝手にっ…」

「…簡潔にまとまってて良いじゃないか。若干無駄な情報が多いけど」

「…若干どころか、五分の一が蛇足だよ」

落胆したかのような田上の台詞に、榊が小さく笑った…その時だ。

ジリリリリリリリリリ

けたたましい内線のベルに、田上の肩と顔がビクツと引きつる。

「…ちよつと失礼」

「…どうぞ」

田上を気の毒そうに見つめた榊は、会話の聞こえぬ部屋の隅へ移動した。

「はい」

『本部指揮官の鈴木だ』

「…おはようございます」

よりにもよってこの男かと、内心舌を打った。特に榊が居る今聞きたい声では無い。

『調査書の状況を聞こうと思ってな』

「それが…やはり前回から、さほど進展は見られません」

『…』

「…申し訳ございません」

無言の間が痛い。こういう時はさつさと謝ってしまうに限る。

鈴木という男は見た目爽やかそうな風体をしている癖に、腹の中は恐ろしく陰湿だ。

殴られて終わり、怒鳴られて終わり、等を期待しては痛い目を見る。精神的にぐちぐち差し込まれる前に、言い訳せず謝るのが経験上最良の選択だった。

『…まあ、それでも一番結果を出しているのは第一だからな』

「有難うございます」

案の定上手く流せそうな空気に一瞬ホツとしたが、やはり一瞬だった。

『ところで…だ』

「はい？」

『第一支部の監視官について、だが…』

とつさに柵を確認する。幸い柵にある茶菓子に夢中で、こちらには気付いていない。

『監視官の”柵”は君の友人だそうだな』

「はい」

『しかも幼い頃からの』

「ええ…まあ」

『君から見て、彼は信用出来る人間かい？』

一瞬、不快感からぞわつと背中がざわつく。

「どういう意味でしょう」

『今までの調査報告会議を通して、おかしいと思わないか？』

「特に」

『第一以外の監視官は、Pとの意志疎通すら難儀している。相手からの意志伝達をひたすら待っている状態だ。そんな状態で生態調査など不可能に近い』

「……」

『実際第一以外の報告書はいずれもほぼ進展は無い』

この糞じじいは何が言いたいのか、と、相手の姿が見えぬのを良い事に、近くに置いてあるクッションを思い切りつねった。

ふと顔を上げると、今度はこちらをジッと見ながら、戸棚にあった中でも一番高価な和菓子にかぶりつく柵と目が合う。

全く、どいつもこいつも糞ばかりだ。

『それなのに第一の情報はどれも具体的なものばかりで、その情報元の殆どが監視官の榊だと聞いた』

田上の何かがプツンと切れた。

『第一の調査結果の殆どが榊の虚言だという可能性は…』

『お言葉ですが』

鈴木の言葉を遮り発した言葉に、一瞬で空気が止まる。

『…それは、他支部の監視官の力不足に伴う結果だと思います』

『…どういう意味だ』

鈴木の声色が明らかに変わったが、止める気は無い。と言うより、既に沸点に到達した脳細胞が停止命令を出してくれない。

『そのままの意味ですよ。鈴木指揮官』

『他支部の監視官を選出した私には”先見の明が無い”とでも言いたいのか』

『そこまでは申しておりません。ただ、異動の多い監視官という位置を、榊は調査団立ち上げ当初から任されている』

『それは貴様のごり押して…』

『10年前のあの日の光景をお忘れになりましたか？』

電話の向こうで、ぐつと言葉に詰まったのが分かった。

『…もし、鈴木指揮官が我々の調査結果よりも確たる情報を既に握っていて、我々のような胡散臭い輩の虚言が調査の妨げになっているのなら…』

『……』

『いつでも言ってお下さい。虚言を本部まで届ける事無く、日本第一』

支部の調査結果としてW P P（世界各国の調査団総本部）に直接伝える事にしますから」

ガチャン。

言い終わるや否や、電話を叩き切った。

元々いけ好かない上司ではあったが、ここまでハラワタが煮えくり返ったのは初めてで、まだ心臓が音を奏でている。

田上は気持ちを落ち着ける為、デスクに両手をつき大きく深呼吸をした。

あの雰囲気だと鈴木もかなりのご立腹だろう。今後の心理攻撃を考えるとゾツとするが、それすら仕方ないと思える。

まさか、榊を気に入らないからと言って虚言だなんて言い出すとは思ひもしなかったのだ。

こっちは他の支部の情報量には目もくれず、情報進展の無さに負い目を感じて落ち込んでいた。そこに来て虚言とは何事か。

さつき逃げるように部屋を出て行った部下達の気持ちを考えると、言い返さずにはいられなかったのだ。

「田上」

突然聞こえた声に驚いて顔を上げると、すぐ目の前に高級和菓子をくわえた榊がいる。

そつだ。コイツが居る事をすっかり忘れていた。

「今の……」

「……鈴木指揮官だ」

「……」

「……」

「……まあ……これ食えや」

田上は榊が差し出した高級和菓子を奪うように取ると、榊の顔面
目掛けて投げつけ、見事額辺りに命中する。

「おい、何をする」

「何呑気に菓子食ってるんだ。それにこれ高いんだぞ」

「…そんな高い菓子を俺の額にぶつけるなよ」

のらりくらりとそんな事を言うこの男にも腹がたつ。

大体いつもそうなのだ。昔からトラブルの中心には大抵榊が居る。
なのに本人は台風の目とばかりに何の害も無く、実際に被害を受け
るのは田上や周囲の人間だった。

「俺は何故お前と友達なんだろう…」

「そんな事より、いいのか？謝らなくて」

「何を。ここまで来て謝るか」

「だってお前…明日は…」

『明日』

榊の言葉に、ぱつと顔を上げる。

「会議明日って言ってなかった…か？」

「…」

『調査団全支部合同報告会議』

名の通り、国内の調査団所属の指揮官が集合する報告会議であり、
勿論本部の鈴木とも顔を合わせる事になる。

「相変わらずタイミング悪いな、お前」

榊の人事のような呟きを背に、田上は膝から崩れ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6024c/>

レーク*ダン*ループ

2010年10月24日10時34分発行